

「四季絵辞」(『一蝶流謫考』(涼仙老樵(山東京山)編)所収)

『続燕石十種』第一卷 p.357

四季絵辞(77)

一蝶作

夫大和絵は、そのかみ、土佐刑部大輔光信がすさみに、堂上のうや／＼しきより、田家のふつ／＼かなるさま、岩木のた／＼ずまひ、やり水のめいぼく、是にはじまりて末々に流れ、予が如きのつたなきまで是を元とす。近頃、越前の産、岩佐の某となんいふもの、歌舞、白拍子の時勢粧をおのづからうつし得て、世人うき世又平とあだ名す。久く世に翫ぶに、亦房州の菱川師宣と云者、江府に出て梓におこし、こぞつて風流の目を喜ばしむ。此道、予が学ぶ所にあらずといへども、若かりし時、あだしあだ波のよるべにまよひ、時雨朝帰りのまばゆきをいとほざる頃ほひ、岩佐、菱川が上にた／＼ん事をおもひつ／＼、よしなきうき名の根ざしのこりて、はづかしの森のしげきことぐさともなれり。さる中に、事に当りて、謫居にさそらへし事、十とせにあまり、廿とせに近きを、ありがたき御恵のめでたき、もとの都に帰り参りぬ。ある人、昔の筆の四時のたはれ絵を、ふた／＼び予に見す。其頃は、心たくましく、眼すゞるに、髪筋を干すぢにわくることは、さもことたらざりけらし。しかし、今の世のありさまにくらぶれば、髪のとえりをこゑず、ふり袖大路をすらず、唯、あまさかる田舎をふなのすがた絵とも思ふべからん。蛸星うつりかはりて、今此一巻を見る事、浦島が此世のむまごに逢へるのためしにひきて、且は喜びをそふるがこゝろにて、それが為に跋す。

右、北窓翁草稿之書

高嵩谷識(印)

右一蝶肉筆之一巻、竹垣庄蔵殿所蔵、余本書に就て、氷下の膳 書半点も誤ざる物、別に家蔵す。

百樹

附言、右本書は草稿に書たるものゆゑ、年号も落款もしるさず、乱写の走筆也。

*「四季絵辞」とあるが「四季絵跋」とするものが多い。北窓翁は英一蝶。竹垣庄蔵は大田南畝や山東京伝と交友あり。柳塘と号し、幕臣にして蔵書家である。高嵩谷は佐脇嵩之の門人、一蝶には孫弟子にあたる。百樹は京伝の実弟山東京山。